

# 別府恋歌

その23

第三章・私のセレナーデ

▼ 何でん釣れよった

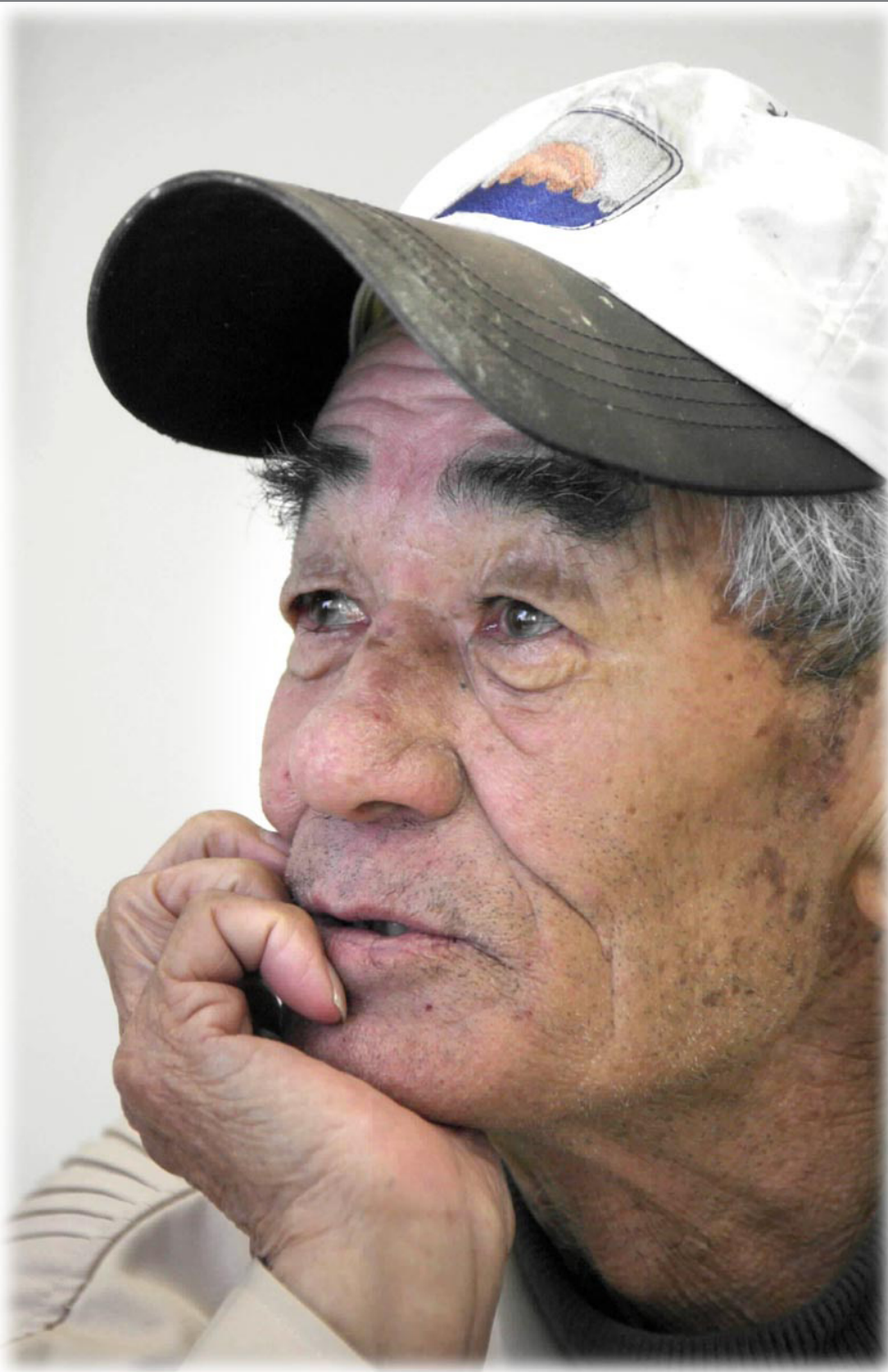
▼ わが青春のステージ

▼ 湯の街のアメリカ

## 心のアルバム開く

心のアルバムに、そっと「あのころ」の思い出をしまっている。

長期連載「別府恋歌」の第三章「私のセレナーデ」。今シリーズは、湯の街で年輪を重ねてきた男女六人をクローズアップ。それぞれの「別府」を描く。



65

何でん釣れよった

二〇〇八年四月十四日

〈米沢日出男。七十九歳。別府湾に船を出して六十年以上の古参漁師〉

確か昭和二十年の七月じゃったと思う。すぐ終戦になったけんな。オヤジが一人ではえ縄しよって、手伝いだしたんが始まりじゃ。確か…十六か十七ん時やった。

昔はな、アナゴとかフクとか

「沖ん出ると、高崎山の位置を確認する。それを目印に漁の場所に行くんじゃ。昔からそうで。別府市松原町在住

タイとか捕りよった。時季によつて違うけどな。

ああ、それとアマテ縄もしよった。アマテ？ 今ん城下カレイんこつちや。

みんな櫓（ろ）をこいで行きよった。ほとんどが伝馬（船）やつたで。機械船もあつたが、油が配給でいつも使えんかつたんよ。

そりゃあ、よう捕れよったで。何でん釣れよった。フクなんか、船ん四つのいけすにウジャウジャよ。多い日は百五十匹は釣れよったで。

〈当時の別府湾は透き通っていた〉

濁りも何もねえで、そらあ美しかったで。どこ行つてん淡い色じゃった。

洗剤ができてからよ。それまで川から泥やごみなんか流れてこんかつた。今は海ん底が汚れて黒うなつちよる。信じられん。

オカ（沖）から見る別府ん街も美しかったで。今んごとビルなんかねえし、湯煙もナンボでん見えよった。ホント、なだらかな坂ん街やつた。

△トン船「米福丸」を操舵（そうだ）し、月に平均十日は夫婦で漁に出る

かじ持つんはワシじゃ。オカンは魚が掛かるか見ちよるだけ。ま、小遣い稼ぎや。

漁師は人に使われん。海に出りゃあ、誰でん対等。それが魅力じゃわ。

毎日食いよる。ほやけん分かるんよ。なんやかんやゆうてん、やっぱ…別府湾の魚はうまいで。





66

## わが青春のステージ

二〇〇八年四月十五日

特大のミラーボールが回転していた。

目の前にフロア。その向こうには、和服やドレスで着飾ったホステスが約三百人。一階・中二階・三階のボックス席を行き来している。

さて、いくかー。

スティックの合図で演奏を始めると、カクテルグラスを手にした数百人の酔客が一斉

錦野旦はトランペットの見習いだった。「たまに歌わせると、変わった声でしたけど…やはりうまかったですね」。別府市南立石本町在住

にこつちを向いた。

中野伸志（しんじ）。六十八歳。

一九六〇年代、海岸線の浜町にあった国際観光キャバレー「ニューナポリ」の元バンドリーダー。

「とにかく毎晩、一流のショーばかりでしたよ。有名なプロ歌手が来たり、ストリップがあつたり…。駆け出しの泉ピン子が漫談したこともありました」

テナーサックス奏者だった。午後七時から深夜まで、チェンジバンドと交代しながらのステージ。

「生演奏に合わせて客がフロアで踊るんです。きついなんて言つてられなかった」

みんな心から笑っていた。

「景気良かったしね。クリスマスなんて、ケーキを手にした酔っぱらいが道端にゴロゴロひっくり返ってた。そんな光景、最近見らんもんね」

三十二歳の時、店のネオンは消えた。

ジャズを奏でた器用な両手で、今、タクシーのハンドルを握っている。

「あのころ、生きる『その先』に何かいいことがありそうな時代だった。誰も想像せんかったですよ…別府がこんなに寂れるなんて」

わが青春のニューナポリ。

「タイムスリップできるもんなら、夢と希望に満ちあふれていたあのステージに戻りたいもんです」



「キャンプ内で初めてアップルパイを食うた。世の中にこんな甘くてウマイもんがあるんか、とたまがった」。別府市駅前本町在住

67

## 湯の街の「アメリカ」

二〇〇八年四月十六日

あれは夢幻だったのか。

アロハシャツにレイバンのサングラス。颯爽（さつそう）と左ハンドルのジープを操る自分を、青い目の彼らは「マイク」と呼んだ。井上義夫。七十八歳。戦後、別府に進駐した米軍の駐屯地「キャ



ンプ・チツカマウガ」で働いた元専属ドライバー。

「あそこに勤めていた日本人は皆、生きるために必死だった…」

満州に生まれた。泉都に引き揚げてきたのは、米軍キャンプ完成から約一年半後の一九四八年初夏。雑役の労働者として、野口原のゲートをくぐった。部屋の暖房。便利な電化製品。リッチな食事。これが戦勝国か、と驚いた。

当時十九歳。

「銀座街の入り口でガリ版刷りの英字新聞を十円で買(こ)うてな。それこそ丸暗記よ。無我夢中で英単語を覚えた」

やがて車両を管理するモータープールへ。別府湾に艦船が入港するたび、軍のライセンスで車を運転、「GI」たちを送迎した。

「富士見通りを上がった所にトラックゲートがあつてな。MP(憲兵)に証明カードを見せて入ると、そこから右側通行。時速五マイル(八キロ)で走らないけんかった」

キャンプの中はアメリカだった。バー、クラブ、レストラン、ボウリング場、ジム…。

「そもそも、何でもあつた。物資が乏しい市民にとっちゃあ、夢の場所やった」

五七年に接收解除。約三千人の米兵は撤収した。

「進駐軍がいたから地域経済が潤った。だから別府は発展できたんじゃないかな」

湯の街から「リトル・アメリカ」が消えて半世紀。兵舎を見下ろしていた老松たちは、今も別府公園に根を張っている。



## ■オオイトデジタルブックとは

オオイトデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・

追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「別府恋歌」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

大分合同新聞社



別府大学

## デジタル版「別府恋歌」 その23

編集 大分合同新聞社  
 初出掲載媒体 大分合同新聞（2007年10月22日～2009年3月14日）  
 《デジタル版》  
 2010年7月30日初版発行  
 編集 大分合同新聞社  
 制作 別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部／川村研究室  
 発行 NAN-NAN 事務局  
 （〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 企画調査部内）

## ●デジタル版「別府恋歌」について

「別府恋歌」は、大分合同新聞社が2007年10月から翌2009年3月まで、同紙夕刊に掲載した連載記事。今回、デジタルブックとして再構成し、公開する。登場人物の年齢をはじめ文中の記述内容は、新聞連載時のもの。

2010年2月26日

NAN-NAN 事務局